

統計でたどる「いわて 150 年」の変化

1 はじめに

本県は、明治5年1月8日に「盛岡県」から「岩手県」に改称され、令和4年1月をもって150周年を迎えました。また、令和8年は、明治9年の県境確定から150年の節目に当たります。

この150年の歩みをたどる上で、各時代の県勢や県民生活の変化を客観的に示してきたのが統計資料です。

本県の統計は、明治14年に刊行された「岩手県統計書」に始まり、現在の「岩手県統計年鑑」へと引き継がれながら、県内の社会経済や県民生活の姿を記録し続けてきました。

約150年前の岩手では、人力車が730台、郵便局は100局であり、自動車はまだ存在していませんでした。一方、現在では自動車保有台数は100万台を超え、携帯電話の契約数は118万件を超えるなど、暮らしや社会の姿は大きく変化しています。こうした変化は、統計データの中に記録されています。

県境確定から150年という節目に当たり、本県がどのような変化を遂げてきたのかを統計データから見つめ直すことは、現在の地域の姿を理解し、これからの岩手を考える上で重要な意義があります。

本レポートでは、長年にわたり蓄積されてきた統計データを用いて、明治期から令和期までの約150年間ににおける人口、産業、暮らしなどの変遷を振り返ります。

統計は、それぞれの時代を生きた人々の暮らしや社会の姿を映し出す記録でもあります。本レポートが、本県の150年の歩みを振り返り、未来を考えるきっかけとなれば幸いです。

なお、本レポートに記載した内容及び見解は、岩手県ふるさと振興部調査統計課調査分析担当が統計データを基に作成したものであり、岩手県の公式見解を示すものではありません。

2 比較対象とした各年代

本レポートでは、明治から令和までの約150年間にわたる岩手県の変化をたどるため、おおむね30年ごとに各時代を代表する統計データを選び、比較しました。

比較に用いた時代区分は、明治期、大正期、昭和前期、昭和後期、平成期、令和期です。

現在確認できる最も古い統計資料は明治14年刊行の「岩手県統計書」ですが、掲載されている統計項目が少なく現在との比較が困難であったため、本レポートではより多くの統計データが掲載されている明治16年刊行の「岩手県統計書」を明治期のデータとして使用しました。

また、戦時中は統計調査の実施が困難であり、データがない年があることから、昭和期については昭和20年代及び昭和50年代のデータを用いています。

なお、統計の種類によって調査年が異なるため、各年代において利用可能な年次のデータを用いて比較しています。

3 明治・大正期と現在の変化

自動車や通信手段の発達により暮らしの利便性は大きく向上しました。一方で、1世帯当たり人員、出生数、小学校数の変化からは、家族構成や地域社会を取り巻く状況が大きく変化したことがうかがえます。

【表 1】

	明治・大正期		現 在	
自動車保有台数（台）	T2	2	R5	100 万
電話加入件数（件）	T2	固定 912	R5	携帯 118 万
1 世帯当たり人員（人）	M16	5. 7	R6	2. 1
出生数（人）	M16	13, 862	R5	5, 432
小学校数（校）	M16	633	R6	268

4 人口と家族

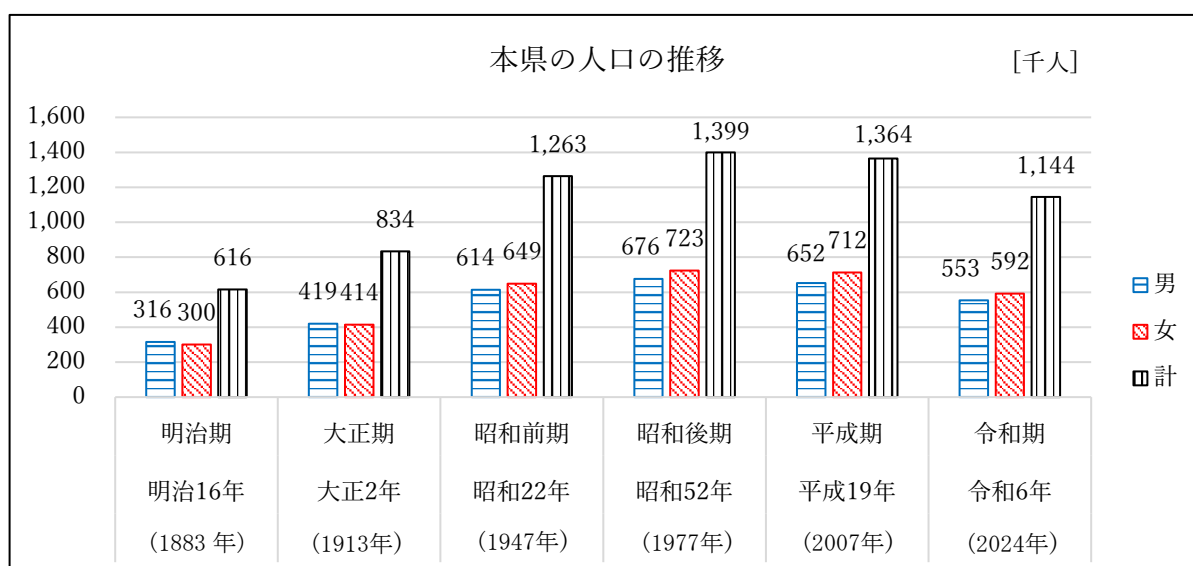
(1) 人口

本県の人口は図 1 に示すとおり、明治期には約 62 万人でした。その後、人口は増加を続け、図 1 には示していませんが、昭和 36 年には約 145 万人と過去最多を記録しました。

その後も平成期の前半までは約 140 万人前後で推移していましたが、次第に減少傾向が強まり、令和期にはピーク時より 30 万人以上少ない約 114 万人となっています。人口の推移からは、本県が人口増加の時代を経て、現在は人口減少に直面していることがうかがえます。

また、男女別人口をみると、大正期までは男性が女性を上回っていましたが、昭和前期以降は女性が男性を上回る状況となっています。近年はその傾向がより顕著になっており、一般的に女性の平均寿命が男性より長いことなどが要因の一つとして考えられます。

【図 1】



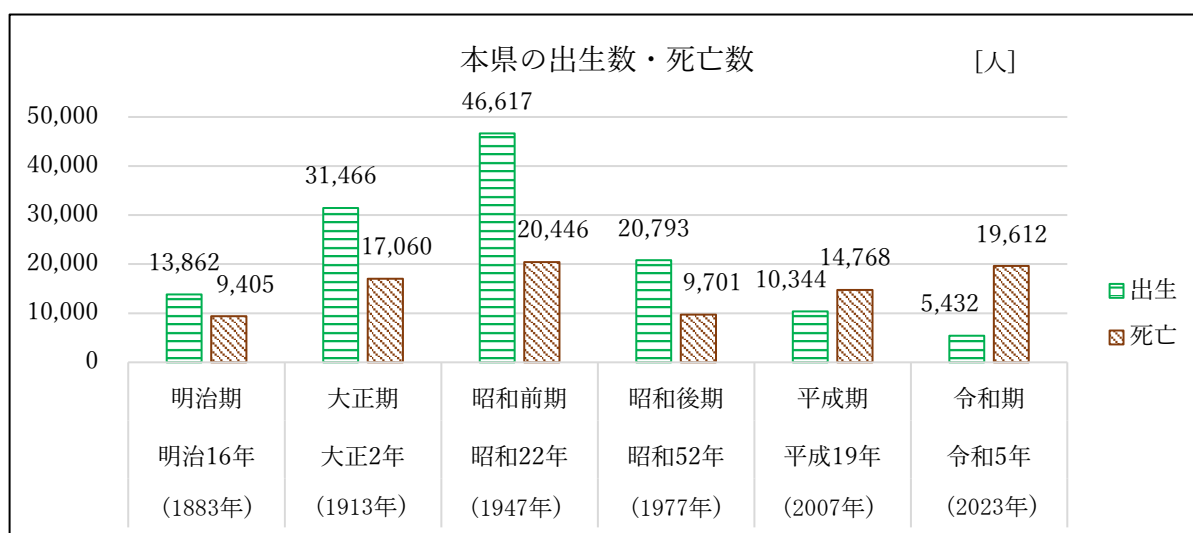
(2) 出生数及び死亡数

出生数は、明治期には 13,862 人でしたが、その後増加を続け、昭和前期には 46,617 人を記録しました。しかし、その後は減少に転じ、令和期には 5,432 人となっています。昭和前期と比べると、出生数は約 9 分の 1 にまで減少しており、子どもの数が大きく減っていることがうかがえます。

一方、死亡数は明治期の 9,405 人から増加傾向で推移し、昭和後期には一時減少したものの、平成期以降は再び増加しています。令和期には 19,612 人となり、出生数を大きく上回る状況となっています。

出生数から死亡数を差し引いた自然増減をみると、昭和前期には出生数が死亡数を大きく上回り、人口増加を支えていました。しかし、平成期以降は死亡数が出生数を上回る自然減へと転じています。少子化（出生数の減少）と高齢化の進行は、現在の人口減少の大きな要因となっていることがうかがえます。

【図 2】

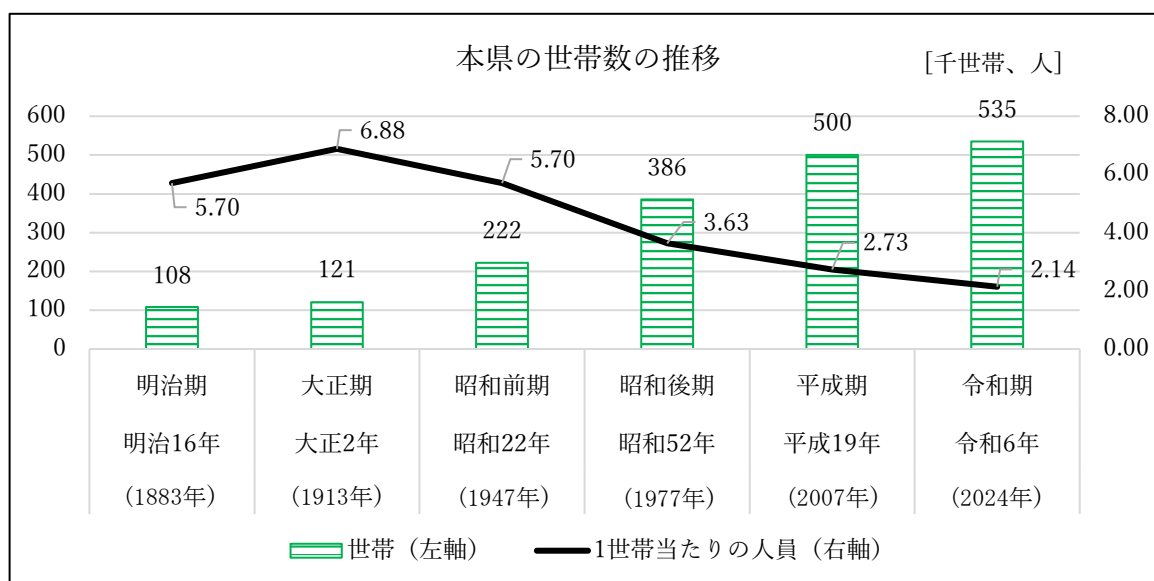


(3) 世帯数

世帯数は、明治期以降、一貫して増加してきました。近年は人口減少が続いていますが、世帯数は増加傾向を維持しています。これは、核家族化や単身世帯の増加により、一つの世帯で暮らす人数が少なくなってきたことが要因の一つと考えられます。

また、1世帯当たりの人員は、大正期の6.88人から令和期には2.14人となり、約3分の1にまで減少しました。かつては祖父母から孫までが同居する三世代世帯も珍しくありませんでしたが、現在では単身世帯や夫婦のみの世帯が増え、少人数で暮らす世帯が主流となっています。世帯数と世帯人員の変化からは、この150年間で家族構成や暮らし方が大きく変化したことがうかがえます。

【図3】



(4) 婚姻数及び離婚数

婚姻件数は、明治期には5,862件でしたが、その後増加を続け、昭和前期には15,189件を記録しました。しかし、その後は減少に転じ、令和期には3,376件となっています。婚姻件数の推移は出生数の変化とおおむね同様の傾向を示しています。

一方、離婚件数は明治期から令和期までおおむね1,000件～2,000件台で推移しています。昭和期以降は婚姻件数が大きく減少する中であっても離婚件数は大きくは減少しておらず、婚姻件数に占める離婚件数の割合は、昭和前期と比べて高くなっています。

【図4】



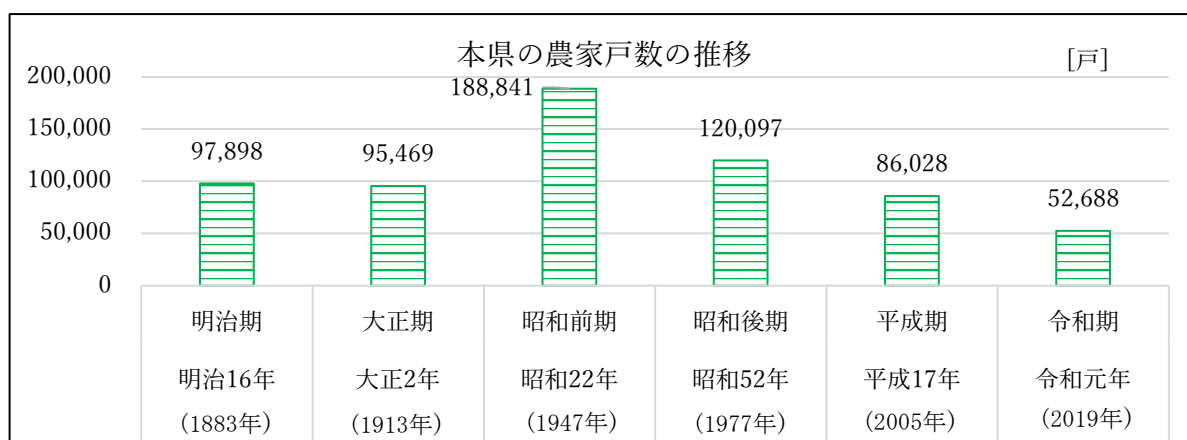
5 産業の変化

(1) 農家戸数

農家戸数は、明治期から大正期にかけては9万戸台で推移していましたが、昭和前期には188,841戸と大きく増加しました。その後は減少を続け、令和期には52,688戸となっています。

150年前の岩手では、農業は多くの県民の暮らしを支える身近な産業でした。しかし、社会や産業構造の変化とともに農家は減少し、現在では昭和前期の3割程度となっています。農家戸数が減少する一方、農業機械の普及や経営規模の拡大などにより、農業を取り巻く環境も大きく変化してきました。農家戸数の推移からは、本県の農業を取り巻く環境が大きく変化してきたことを読み取ることができます。

【図5】

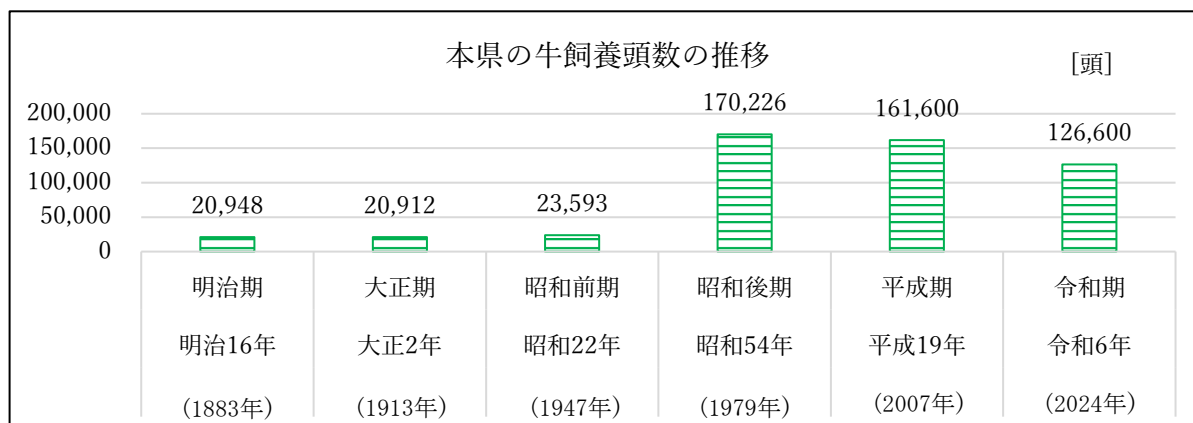


(2) 牛飼養頭数

牛の飼養頭数は、明治期から昭和前期にかけては2万頭台で推移していましたが、昭和後期には170,226頭と約8倍に増加しました。その後は減少しているものの、令和期でも126,600頭が飼養されています。

かつて牛は田畑を耕し、荷物を運ぶために欠かせない存在でした。時代とともにその役割は変化し、現在では肉用牛や乳用牛を中心として飼養されるようになっていました。牛飼養頭数の推移からは、本県における畜産の規模や役割が大きく変化してきたことがうかがえます。

【図6】



6 暮らしの変化

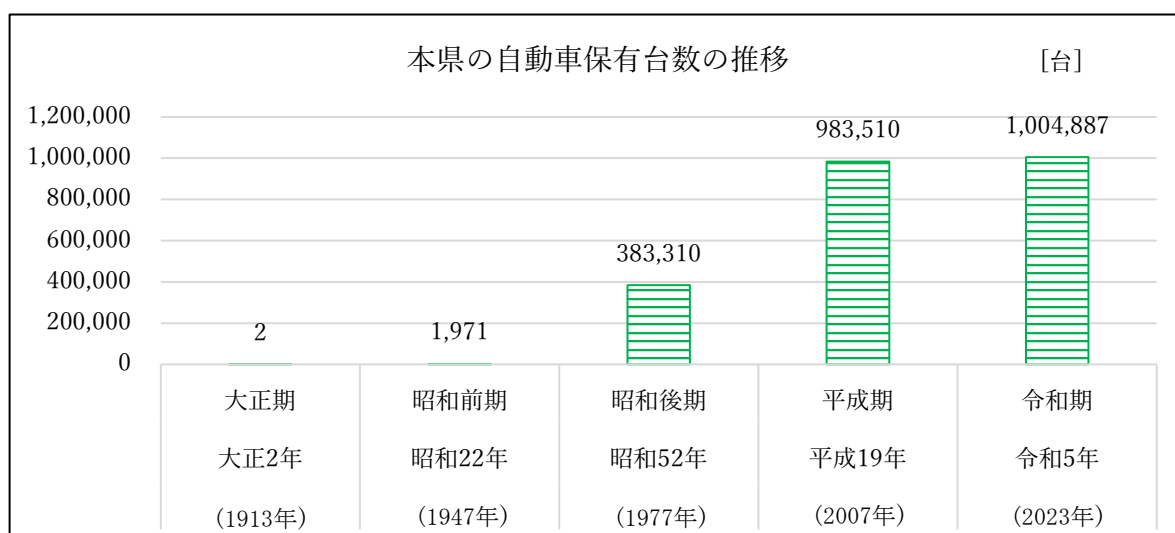
(1) 自動車保有台数

150年前の岩手では、人や物の移動手段として馬車や人力車が利用されており、自動車はまだ存在していませんでした。その後、ガソリン自動車の普及に伴い、本県でも大正期に初めて2台の自動車が統計に記録されています。

自動車保有台数はその後急速に増加し、昭和前期には1,971台、昭和後期には383,310台となりました。これは昭和後期においては世帯数とほぼ同水準であり、多くの家庭に自動車が普及したことがうかがえます。さらに令和期には1,004,887台と令和期の世帯数のほぼ2倍となっており、県民の暮らしに欠かせない移動手段となっています。

自動車保有台数の推移からは、人力車や馬車の時代から、自家用車が日常生活を支える時代へと大きく変化したことが分かります。広い県土を有する本県において、自動車は通勤や通学、買い物など日々の暮らしを支える重要な交通手段となっています。

【図7】



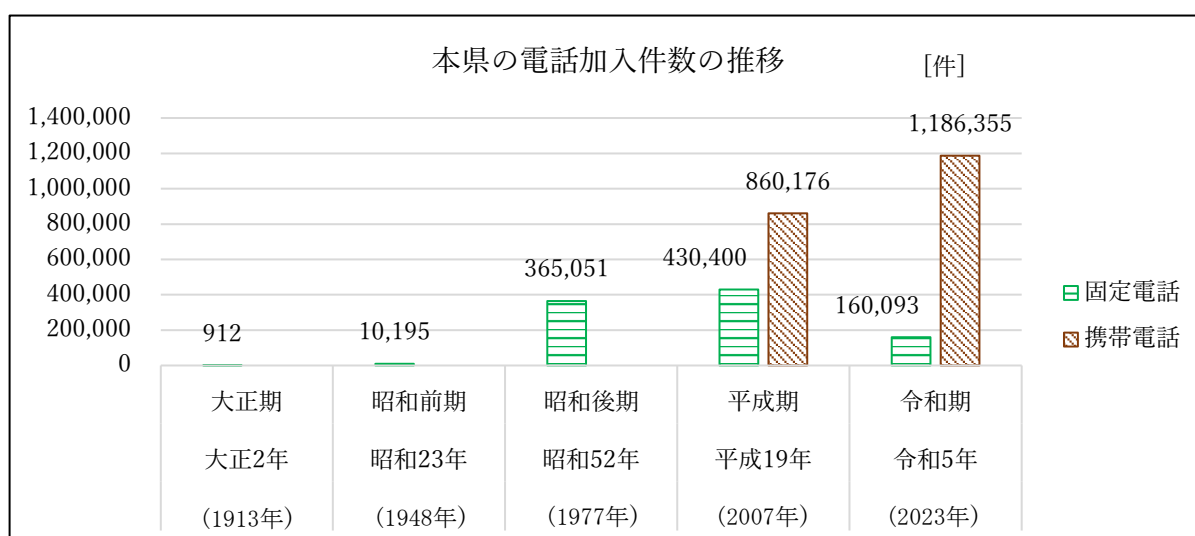
(2) 電話加入件数

本県の固定電話加入件数は、大正期に初めて 912 件が統計に記録されて以来、増加を続けました。平成期には 430,400 件となり、同時期の世帯数 50 万世帯に近い水準に達するなど、多くの家庭や事業所に普及しました。

しかし、その後は携帯電話やスマートフォンの普及に伴い減少に転じ、令和期には 160,093 件となっています。一方で、携帯電話の契約数は 118 万件を超えており、通信手段の中心が固定電話から携帯電話へと移り変わったことが分かります。

電話加入件数の推移は、この 150 年間における通信技術の進歩と暮らしの変化を象徴しています。各家庭に固定電話が普及した時代から、一人ひとりが携帯電話を利用する時代へと大きく変化したことが分かります。

【図 8】

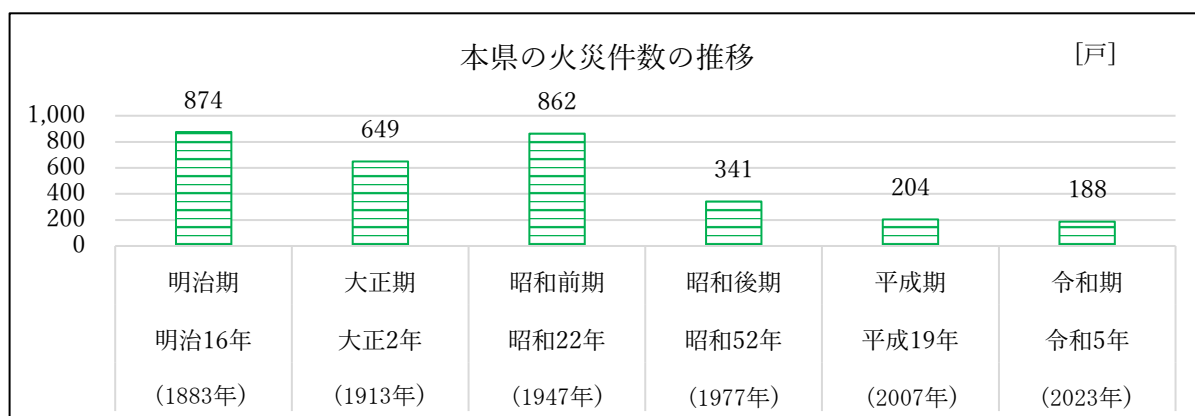


(3) 火災戸数

火災による焼失戸数は、明治期から昭和前期にかけて 600 戸～800 戸台で推移していましたが、昭和後期以降は 100 戸～300 戸台へと大きく減少しています。

消防体制の充実や住宅の防火性能の向上などを背景として、火災による被害は大きく減少したと考えられます。火災戸数の推移は、この 150 年間で暮らしの安全を守る仕組みが着実に発展してきたことを示しています。

【図 9】

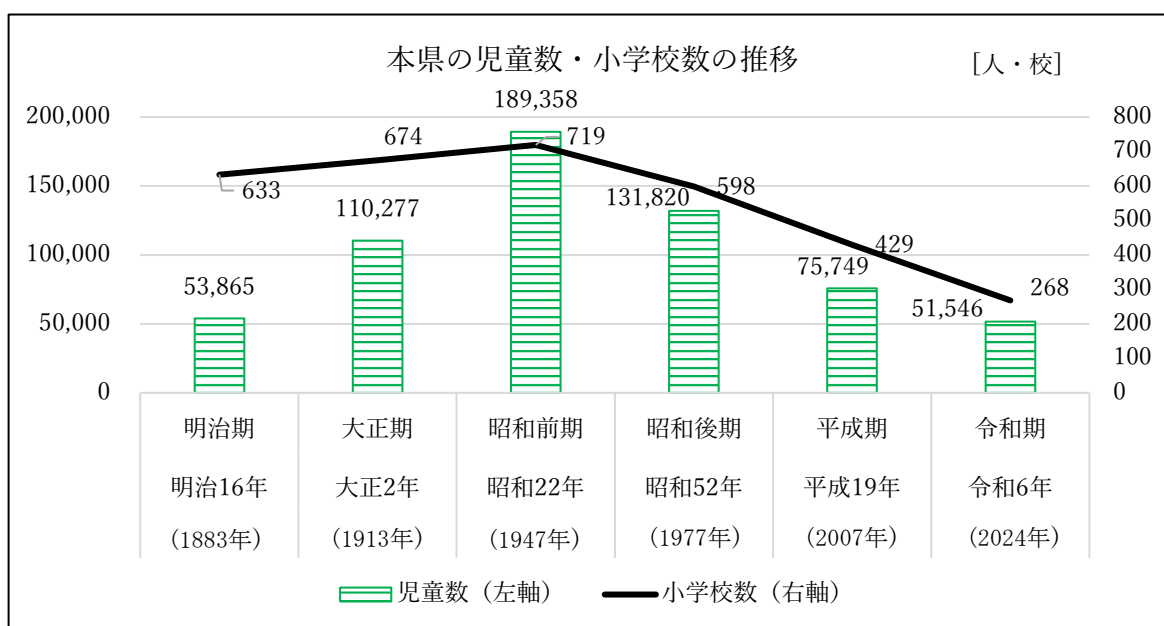


(4) 児童数及び小学校数

児童数は、昭和前期の 189,358 人をピークに減少を続け、令和期には 51,546 人となっています。かつては多くの子どもたちでにぎわっていた学校も、少子化の進行とともに児童数が減少してきました。その推移は出生数の変化を反映しており、子どもの減少が地域社会の姿にも変化をもたらしてきたことがうかがえます。

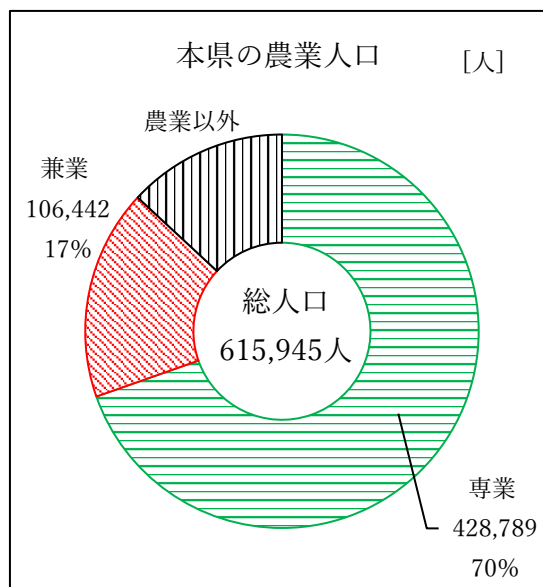
また、小学校数も昭和前期の 719 校から令和期には 268 校となっています。その背景には、児童数の減少や学校統合、教育環境の充実などがあると考えられます。児童数と小学校数の推移は、この 150 年間における地域社会と教育環境の変遷を象徴するデータの一つといえます。

【図 10】

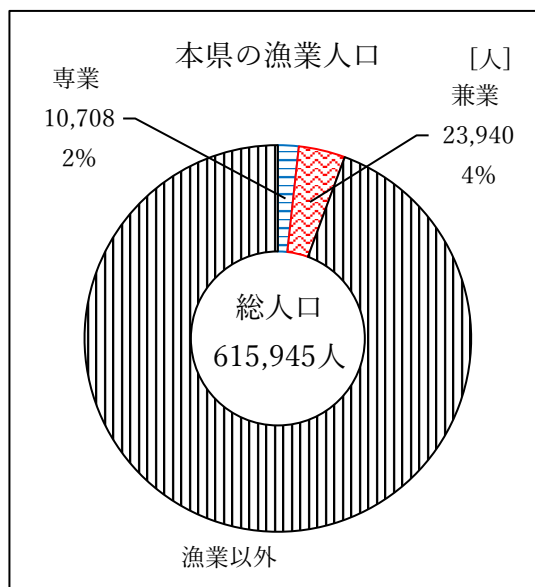


7 明治 16 年の主な統計データ

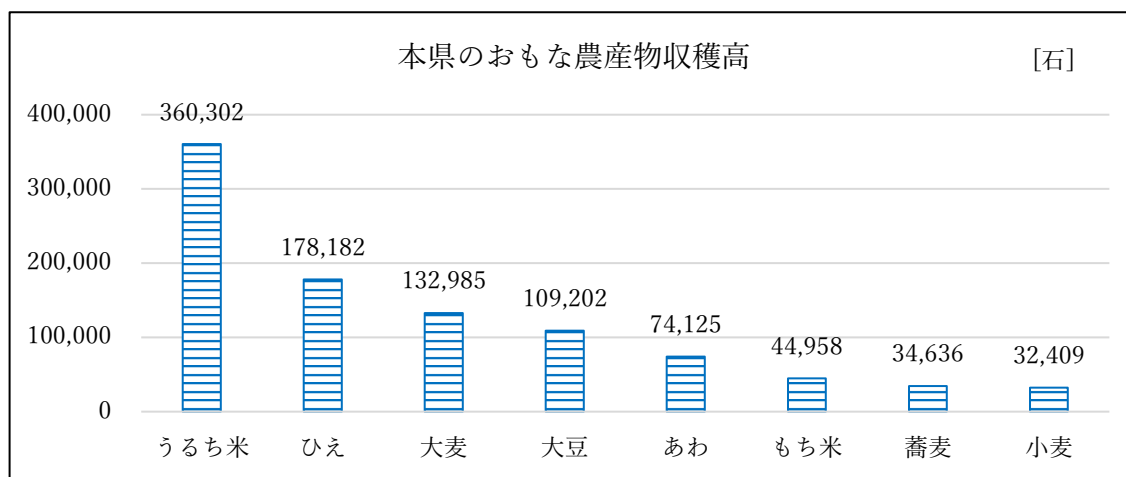
(1) 農業人口



(2) 漁業人口



(3) おもな農産物収穫高



※ 1 石＝約 150 kg

(4) 酒類の醸造

酒 類	清 酒	濁 酒	焼 酎	白 酒	味 醃
醸造量 (石)	58,462	2,324	549	142	12

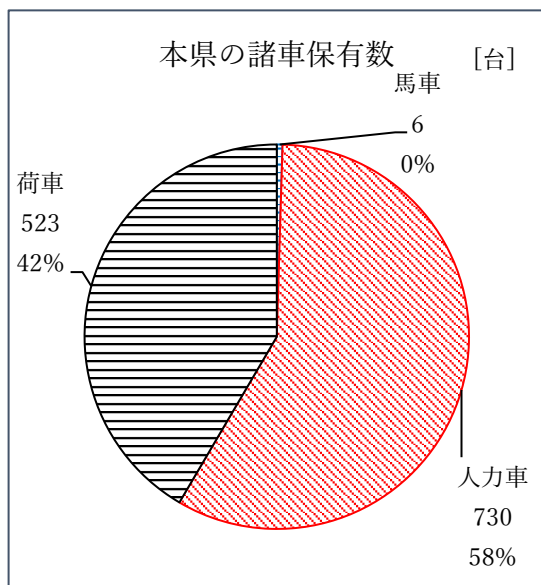
※ 1 石＝約 1800

※ 「岩手県統計書」に記載された酒類は、当時の酒税制度上、区分されていたものと考えられる。

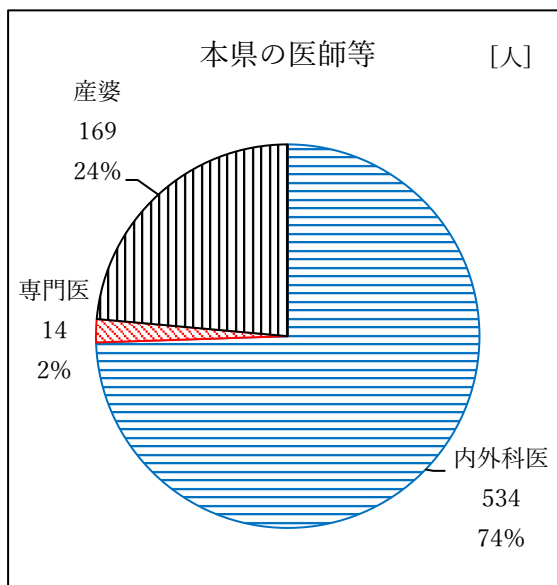
(5) 商業店舗

種 類	小 売 商	雑 商	仲 買 商	卸 商
店舗数 (店)	15,937	1,092	319	201

(6) 諸車



(7) 医師等



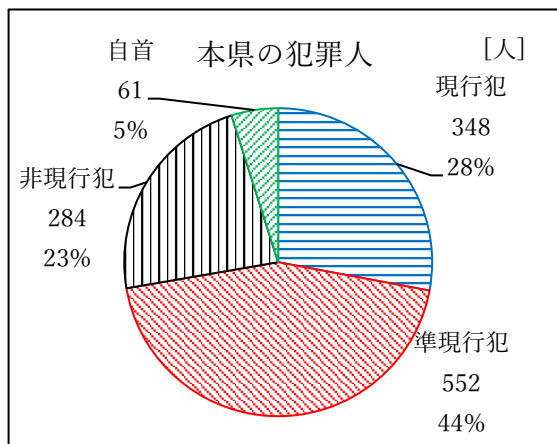
(8) 郵便

局数 (局)	取扱郵便数 (通)	
	発	着
100	621,300	813,644

(9) 通運会社

本分社取扱所数 (箇所)	取扱荷物数 (個)	
	発 荷	着 荷
64	478,376	508,791

(10) 犯罪人



8 おわりに

今から 150 年前の岩手では、人力車が走り、多くの人が農業に従事し、自動車も電話もありませんでした。一方、現在では自動車が 100 万台を超え、携帯電話は私たちの生活に欠かせないものとなっています。人口や出生数は減少しているものの、暮らしの利便性は大きく向上し、安全に関わる指標にも改善がみられます。

統計は、こうした時代の変化を記録し続けています。

本レポートを通じて、一つひとつの数字の向こう側にある岩手県の歩みや先人たちの暮らしに思いを馳せていただければ幸いです。そして、これから先の 150 年をどのような岩手にしていくのかを考えるきっかけとなれば幸いです。